シリーズ 第49回

お金が埋まっていた話

大判小判や財宝が埋められているという、埋蔵金伝説は各地に存在し、現在でもテレビなどで話題になることもありますが、大判小判ではなくても、地中に埋められた大量のお金が発見される例は、ほぼ全国的にみられます。最近では、平成二十二年に、赤磐市で備前焼の壺に入れられた約六、〇〇〇枚の古銭が発見された例が記憶に新しいところです。県北では美作市や勝央町にも例がありますが、実は鏡野町でも、大量の古銭が発見されたことがありました。元禄四年（一六九一）刊の『作陽誌』の古跡部・薪郷の項に次のような記述があります。

目崎城跡

「平島墓　目崎麓に在り。延宝三年（一六七五）、邑民攤塍して忽ち一銭を見る。随いて掘れば随いて出で終に八十緡を得たり。皆古銅銭なり。」

解説すれば、村人が畦を広げる作業をしていると、地中からお金が見つかり、さらに掘りすすめると八〇緡もの古銭が出土した。ということです。

こうした大量の銅銭を地中に埋める行為は、十三世紀後半から十六世紀後半頃、鎌倉時代から戦国時代頃にかけて全国的に行われていました。

これらの銭は「埋蔵銭」「備蓄銭」「埋納銭」などと呼ばれ、その目的については、戦乱による焼失や盗難を逃れるために埋めたとか、地鎮のために埋納したなど諸説ありますが定かではありません。いずれにしても、埋めた本人が何らかの事情で掘り返せなかったものが、後世の人の手によって農作業や工事中、あるいは発掘調査によって発見されることになるのです。

見つかったのは『作陽誌』が刊行されるわずか十六年前のことですので、言い伝えや昔話ではなく、事実の出来事であったことは間違いないでしょう。発見された場所は「目崎麓」とあることから、戦国時代の山城「目崎城」の城跡の麓と思われ、薪森原・下原付近に当たります。「平島墓」という墓とされているものの、墓地にこれほどの大量の銭を埋納することはありませんので、当時の人の勘違いであると思われます。

「八〇緡」というのは、銅銭を数える単位で、当時銅銭は真ん中の穴にわらのひもなどを通して保管し、そのひもを通した銅銭の単位を「緡」と呼んでいました。緡には九十七枚前後（一〇〇文）の百文緡と、九七〇枚前後（一貫文）の貫緡が主流ですが、平島墓の例はいずれであったかは不明で、百文緡であったとしても八〇緡といえば七、七六〇枚前後になりますので、かなりの量になります。

また、「皆古銅銭なり」とあることから、江戸時代に流通していた寛永通宝以前の貨幣であったことがわかります。

この銅銭は、どのような立場の人によって何のために埋められたのでしょう。目崎城との関連なども想像できなくはないですが、残念ながら確証に至る根拠はありません。

いずれにしても、他の事例と同じく鎌倉時代から戦国時代頃に埋められたものと思われ、当時の鏡野町域においても貨幣経済が浸透し、それらを多く備蓄する経済力のある人物が存在したということは確かでしょう。

〈参考〉美作市で出土した古銭（11,742枚）
英田歴史民俗資料館蔵

〈参考〉中世の銅銭
（久田堀ノ内遺跡出土）

参考資料：『作陽誌』、『日本の美術　出土銭貨』、『備前焼フォーラム 商う』
協力：美作市教育委員会、英田歴史民俗資料館

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/